

image-01



image-02

森の印刷所

ウィリアム・モリスは金儲けの天才だったという説がある。そう書いたのは渡部昇一で、私たちはこの奇説に、エッセイスト・クラブ賞をえたかれの著書『腐敗の時代』のなかで接することができる。

ケルムスコット版として知られる本の装幀のみならず、壁紙や織物の天才的なデザインだったモリスは、同時に、イギリス労働運動の先達のひとり、イギリスで最初のマルクス主義者のひとりでもあった。この、モリスにおけるデザインと社会主義とのむすびつきが、渡部にはことのほか不愉快だったようだ。これでは安心して、自分の書齋を美しいモリス・プリントでかざることす



らできないではないか。かれの「知的生活」にとって、モリスをもっと消化しやすいものにおかなくてはならない。そのため「方法」が、モリスを金儲けの天才にしたのであろう。モリスの家具や壁紙はよく売れた。それはかれが「自分の店」をもち、製品の質を高度にたもつことができたからだ。すなわち、かれの仕事をかざしたのにはほかならぬ資本主義の経済体制があった。したがって「生活に芸術的な質の高い手造り品を入れたらば、社会主義に抵抗して、私有権の神聖を尊重しなければならない」

「しかるに、見てはならない夢を見てしまったモリスには、この簡単な理由が見えなかった。当然の結果として、かれは社会主義的な労働運動に手ひどく裏切られる。

「革命の実践団体から退いたモリスは何をやったか、と問えば、彼は自分の『出発点』に帰ったのである。そして手造りに近い美観な本を作り出すことに夢中になった。モリスは十五世紀の印刷術を復興することを意図したのである。これが有名なケルムスコット版の誕生であった。」

このモリス像を批判するのは、本来であれば私などではなく、中公新書で『ウィリアム・モリス』を書いた小野二郎の役目である。

製品の質をたもつのは、それを獲得し、まもる、職人たちの自

森の印刷所

ウィリアム・モリスは金儲けの天才だったという説がある。そう書いたのは渡部昇一で、私たちはこの奇説に、エッセイスト・クラブ賞をえたかれの著書『腐敗の時代』のなか



で接することができる。

ケルムスコット版として知られる本の装幀のみならず、壁紙や織物の天才的なデザインだったモリスは、同時に、イギリス

労働運動の先達のひとり、イギリスで最初のマルクス主義者のひとりでもあった。この、モリスにおけるデザインと社会主義とのむすびつきが、渡部にはことのほか不愉快だったようだ。これでは安心して、自分の書齋を美しいモリス・プリントでかざ

image-03

9/17
7/15/07 編集ID: 148706 表示ID: 148706 詳細ID: 7-67D 2/6/706 148706

統的にひらかれる集会の第一回目にあたるあつまりだった。日本の商社やアメリカの巨大アグリビジネス（農業関連産業）は、ミランダオの農民から大反響を醸成する大々的な農地を強制的に取りあげ、そこを日本むけのバナナ農園にしまった。「すわって話させてほしい。私は背がひくいので、すわっても立っても見える人には見えるし、見えない人には見えない。おなじことではしよう」と、はじめに笑わせて、だがサントスさんの話は相当にきつい内容のものだった。かれはミランダオのガデコ農園における労働者のたたかいと、それにくわえられた弾圧について語り、自然資源や人的資源がこんなにもゆたかなのに、こんなにもわれわれがまずしいのは、われわれが何某で怠惰なせいではないのかと自問せざるをえないところまでおいこまれた。かれらの絶



17/17
7/15/07 編集ID: 148706 表示ID: 148706 詳細ID: 7-67D 2/6/706 148706

梅棹のいう四十数年前の民族学博物館構想は、これらの研究所に吸収され、日本の敗戦とともに立ち消えになった。そして日本経済の高度成長によって、ふたたび浮上し、国家の「民族政策に寄与する」学問の「前線配置」のうちに重要な位置をしめるべきものとして、以前とはケタがいがいの規模で実現されることになった。「おくれればせながら、これで世界の先進諸国と肩をならべることができるようになった」という梅棹のことばに、いまはめでたく解消された昔日の「劣等感」のなごりを見いだすことができる。「フィリピン・バナナ」の集会に出席した。それはミランダオのバナナ農園ではたらく労働者たちのたたかいを組織してきたドン・サントスさんをむかえて、日本全国で一カ月にわたって連

11/11
7/15/07 編集ID: 148706 表示ID: 148706 詳細ID: 7-67D 2/6/706 148706

しめるべきものとして、以前とはケタがいがいの規模で実現されることになった。「おくれればせながら、これで世界の先進諸国と肩をならべることができるようになった」という梅棹のことばに、いまはめでたく解消された昔日の「劣等感」のなごりを



15/11
7/15/07 編集ID: 148706 表示ID: 148706 詳細ID: 7-67D 2/6/706 148706

梅棹のいう四十数年前の民族学博物館構想は、これらの研究所に吸収され、日本の敗戦とともに立ち消えになった。そして日本経済の高度成長によって、ふたたび浮上し、国家の「民族政策に寄与する」学問の「前線配置」のうちに重要な位置を

image-04

